



解剖見学を通して学んだこと

1 年 比嘉 七彩

解剖見学を行う前、私は初めての経験であるため解剖に対して、人体を切断する恐怖や臓器を見ることがや臭いに耐えられるかなどの不安な気持ちを少なからず抱えていました。しかし、見学前に御献体を私たちに提供してくださる理由を調べると、「医学の発展のために自分の身体が役に立って欲しい」と書かれており、私は御献体に対して失礼のないような行動をとることを心に誓い、解剖見学に臨むことができました。

実際の御献体を目にした時、今までの恐怖といった感情はなくなり、勉強させていただく感謝の気持ちと共に、より一層気が引き締まる思いになりました。今まで解剖学の授業では教科書や模型を用いて人体の構造を学んできましたが、臓器の位置は理解できていても、細かい血管や神経の形態は曖昧となっていました。始めに肺を見たとき、教科書に書かれている形と同じであったことに驚きました。しかし、色や大きさは全く同じではなく、肺は点状に黒ずんで大きく、心臓も教科書に載っている大きさよりも大きかったため、人それぞれ違うことを学びました。御献体には胃瘻の跡が残っており、経口摂取が困難だったことが分かり、その方の生前の姿を想像し、医師や看護師を目指す学生のために献体登録して下さったことに感謝の気持ちで一杯になりました。また、肺や腸を実際に持ってみて、今までは文字だけで全く想像ができなかった重さや長さを、触ることによって知ることができ、一生忘れられない体験となり学びになりました。基礎看護学実習を通して理解が深まった肝臓についても、位置や大きさ、色を観察でき今まで学習してきた事が頭の中で繋がり、学びになりました。

私は将来看護師になった時、解剖見学での学びを忘れず、患者様一人一人の尊厳を保ち、尊重した態度で関わっていきたいと感じました。解剖見学ができたことを当たり前だと思わず、これからも感謝の気持ちを持ち続け、立派な看護師になれるよう勉学に励んでいきいと思います。

解剖見学を通して学んだこと



1 年 緑 美蘭

解剖見学に行く前は、人体を解剖することの恐怖や直視できるのかという不安がありましたが、解剖学の教科書で復習をした時に、血管の走行や臓器の形や大きさを見学して、更に知識を深めたいと思いました。

解剖室に入ると、独特なおいと臓器を持つという不思議な感覚に怖さを感じました。しかし、その人が生まれてきてから最期まで人体を支えてきた臓器を見学することで、肺は黒い点状痕、心臓には肥大があり、生前の喫煙習慣や心疾患を患っていたことが分かりました。臓器に触れるときは大切に臓器を持つ気持ちが手から伝わるよう優しく丁寧に触れましたが、正直肺を持った瞬間、臓器を持つことが初めてだったため怖くて手が震えました。しかし、実際に見て触れることで人体の構造を深く理解することができると学びました。人体の構造については理解していたつもりでしたが、実際に見学すると私がイメージする人体と異なっていました。例えば右肺の場合、切断した 1 cm 程の空洞は気管支だと思っていると、それは肺動脈の空洞であったことや、腸間膜は薄くて破れやすいと思っていましたが、人の手では破れない程強いことが分かりました。

また解剖見学を通して、倫理を深く考える機会となりました。献体された方と家族の思いを考えていくうちに複雑な気持ちになり、自分の家族が亡くなった時は、最期まで看取った時の姿で見送りたい思いや、約 2 年間待って遺骨で帰ってくると思うと、何とも言えない感情になりました。しかし献体登録者は医学に貢献したい意思があり、尊重しなければなりません。今後、患者の献体登録の意思決定場面に立ち会う際は、患者と家族の気持ちを傾聴し、両者が合意できるよう、意思決定支援を行う必要があります。そのためには患者や家族と信頼関係を築き、思いをくみ取れる看護師を目指していきたいと思います。

